

Title	サードプレイスにおける経験がもたらす地域愛着と協力意向の形成
Author(s)	小林, 重人; 山田, 広明
Citation	地域活性研究, 6: 1-10
Issue Date	2015-03
Type	Journal Article
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/12781
Rights	Copyright (C) 2015 地域活性学会. 小林 重人, 山田 広明, 地域活性研究, 6, 2015, 1-10. 本著作物は地域活性学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Association of Regional Development and Vitalization.
Description	

サードプレイスにおける経験がもたらす地域愛着と協力意向の形成

The Formation of Place Attachment and Cooperative Attitudes through Experiences in Third Place

小林重人、山田広明（北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科）

Shigeto KOBAYASHI, Hiroaki YAMADA (Japan Advanced Institute of Science and Technology)

要旨

本稿の目的は、非常設型カフェの利用者の地域愛着を高めることで、利用者の地域に対する協力意向を形成する過程が効果的に機能するカフェの経験と利用者の属性を明らかにすることである。そのため、非常設型カフェの利用者に対してアンケート調査を実施した。分析結果から、地域外に居住する利用者の協力意向の形成には、地域の魅力となるメニューの提供と知らない他者とのコミュニケーションが寄与することを示した。また、これらの二要素に対する肯定的評価と地域愛着には有意な相関があることを示した。以上の結果から、地域愛着が中立である利用者の協力意向の形成には、カフェにおいて二要素を経験させることが効果的であると結論付ける。

キーワード 非常設型カフェ、コミュニティカフェ、物質的環境、社会的環境、ソーシャル・キャピタル

1. 研究背景

1.1. サードプレイスの機能と問題点

サードプレイスとは、自宅（ファーストプレイス）や職場・学校（セカンドプレイス）以外で居心地がよく、気のおけない仲間たちと会話を楽しむことができる場である（Oldenburg 1989）。欧州ではカフェやパブ、日本では公民館や居酒屋などがサードプレイスの例として挙げられ、サードプレイスはインフォーマルな公共生活の中核的環境として地域コミュニティの拠点となっている。

Oldenburg のサードプレイスに対する理解について、舟橋（2011）は「正常な社会における重要な社会的関係性と経験を提供し、福祉の感覚を保持させる」という「社会関係」や「コミュニティ」「公共の場」といったキーワードが特徴的であることを指摘している。

その一方で、人間関係から逃れるためや気分転換のために若年者を中心として「自分ひとりの時間を過ごす」というマイプレイス型のサードプレイスも求められている（小林・山田 2014）。White（2014）は、日本の喫茶店が交流の場であると共に孤独な時間を過ごす場にもなっていることを指摘しており、フロリダ（2008）もサードプレイスがコミュニティを魅力的に見せる役割を果たす一方で、ひとりになれる場としても活用されていることを報告している。つまり、必ずしもサードプレイスが地域交流の拠点になっているわけではない。

近年、Oldenburg が述べる交流型と自分ひとりの時間を過ごすマイプレイス型の両者の機能を併せ持つサードプレイスを、住民自身が地域に作り出そうとする試みが活発に行われている。それらの多くはまちの縁側やまちの居場所、コミュニティカフェという形で取り組まれ、一定の成果を収めている（日本建築学会 2011；長寿社会文化協会 2014）。多くのコミュニティカフェでは、誰もが訪れることができ、それぞれが思い思いに時間を過ごせ、他者との社会的接触ができる場を提供するという目的が掲げられており（久田 2004）、利用者自身や利用目的の多様性が認められている。しかしながら、コミュニティカフェの持続性や多様性を担保する上で、建物やスタッフの確保が運営上の重荷となったり²、コミュニティカフェ内になじみが形成されることで新規の来訪者が入りにくかったりするなどの問題点が指摘されている（大分大学福祉科学研究センター 2011）。

1.2. 非常設型サードプレイスの成果と課題

コミュニティカフェにおける持続性と多様性の問題を解決した事例として、石川県能美市における「第3の生活拠点創出事業」がある（能美市 2014）。この事業では、地域関与の低い若年者を主なターゲットに、居心地が良く、かつ多様な価値観を持つ人々が共存できるサードプレイスとして市内にカフェを創出した。「ひよっこりカ

¹ 林田（2011）は、カフェやパブといった「ある空間がサードプレイスである」のではなく、「ある空間がある人にとってはサードプレイスになる」と述べている。

² コミュニティカフェの約4割強が赤字採算であり、補助金を除くと7割近くが赤字採算となっている（大分大学福祉科学研究センター 2011）。

フェ」と名付けられたこのカフェの主な特徴は、1) 期間限定の非常設型、2) 交流の場であることを謳いすぎない、3) メニューや器、カップに地域の資源を使う、という3点である。1) と 2) のような場として設計した意図は、多くのコミュニティカフェが抱える運営コストの負担増と利用者の固定化という問題に対処するためである。期間限定の非常設型にすることにより施設運営費と人件費を抑え、交流の場であることを強調しないことによって、交流志向の利用者とマイプレイス志向の利用者の双方にとって滞在満足度の高いカフェを作り出すことに成功している。しかし、このカフェは非常設型であるがゆえに交流型のサードプレイスに見られる連続的で濃密なコミュニケーションが実現しにくいという問題が生じている(能美市 2014)。

1.3. サードプレイスを媒介とした運営者と利用者のコミュニティ形成モデル

非常設型であることの利点を活かしながら、上述したコミュニケーションにおける欠点を克服できる新たなコミュニティカフェの運営手法として小林・山田(2014)は、図1に示すサードプレイスを媒介とした運営者と利用者のコミュニティ形成モデルを提示している。

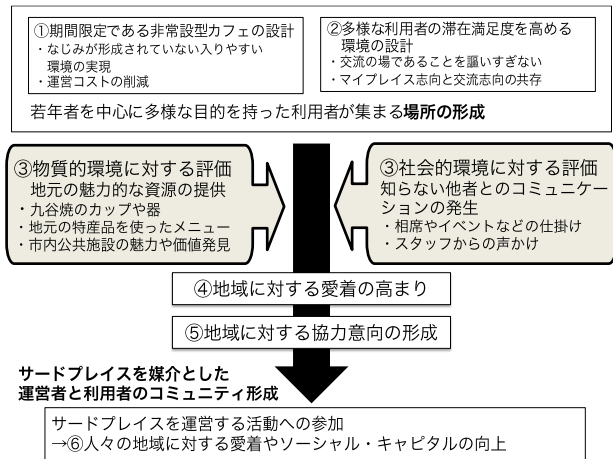


図1 サードプレイスを媒介とした運営者と利用者のコミュニティ形成モデル:小林・山田(2014)より引用

このモデルでは、非常設型のカフェでは達成することが難しい利用者同士での濃密な交流の実現に力点を置くのではなく、利用者がカフェの運営側に回ることによって既存の運営者と利用者が協働するコミュニティの実現に主眼を置いている。利用者と運営者が交流することにより、両者のソーシャル・キャピタルが向上するだけではなく、カフェを運営する上での持続性やカフェ利用者の多様性を確保することも狙っている。では、どのようにして非

常設型のカフェ利用者を運営者側へと転じさせることができるのだろうか。

提案されたモデルによると、カフェにおける物質的環境と社会的環境に対する利用者の評価を高める仕掛けを取り入れることによって、利用者の地域に対する愛着を高め、それにより地域に対する協力意向が形成されることで、利用者がサードプレイスを運営する活動に参加している。ここで述べられている「物質的環境に対する評価」とは、カフェで提供される地域資源を用いたメニューや器だけではなく、建物やそれを取り巻く自然といった物理的な環境も含まれる。もう一方の「社会的環境に対する評価」とは、相席やスタッフからの声掛けを契機とした知らない他者とのコミュニケーションといった対人関係のことを指している。このモデルにおける一連のプロセスは(図1の③④⑤に該当)、引地他(2006)による「地域に対する愛着の形成過程」を拡張する形で構築されたものである。引地他(2006)は社会的アイデンティティ理論を援用しながら、地域の景観や特産品といった物質的環境と地域における人間関係や賑わいといった社会的環境に対する評価が高い住民ほど地域に対する愛着³が高まり、地域に対する協力意向も高まることを明らかにしている。

上述した2つの環境に対する評価と場所への愛着との関係についてBrown & Perkins(1992)は、場所への愛着過程は、社会物理的環境において個人が経験する行動的、認知的、情動的埋め込みを反映すると述べており、Hidalgo et al.(2001)やWaxman(2006)も物理的要因と社会的要因によって場所への愛着が形成されていることを述べている。地域愛着と地域に対する協力意向との関係について鈴木・藤井(2008)は、地域愛着が高い人ほど町内会やまちづくり活動といった地域への活動に熱心である傾向であることを示しており、石盛(2004)も地域愛着がまちづくり活動への参加の積極性と正の相関を持っていることを示している。これらの先行研究からも図1の③④⑤に該当する協力意向の形成過程の論理的妥当性は高いと言える。

1.4. サードプレイスの短時間滞在における地域に対する愛着と協力意向形成の要因

しかしながら、地域に対する愛着形成には居住年数が強く影響すると言われており(Bonaiuto et al. 1999; Brown et al. 2004)、非常設型カフェのような短時間の滞在によ

³ 引地他(2006)は、「地域に対する愛着」を「人と地域との絆や情緒的なつながり」と定義しており、本稿においてもこの定義を採用する。

ってすべての利用者の地域に対する愛着を高め、協力意向を形成することは容易ではない。一方で単純に居住年数が長くても地域に対する愛着が形成されず、地域での経験の質が地域愛着の形成に大きな影響を与えるという研究報告もある(谷口他 2012)。杉本他(2003)は、新来居住者の伝統的祭りへの参加に関する調査研究から、新来居住者が伝統的祭りを見物することによって地域への愛着が生まれることを示している。では、非常設型カフェといった短時間の滞在では、どのような利用者が地域への愛着を高め、そして協力意向を示すのか、またその愛着や協力意向は非常設型カフェにおけるどのような経験によって形成されているのであろうか。これまでの先行研究からは、非常設型カフェにおける利用者の属性や経験の違いによる地域に対する愛着、及び協力意向の形成の程度については明らかとされていない。

2. 研究目的

本研究の目的は、非常設型カフェの利用者の属性とカフェにおける経験の差異が、利用者の地域に対する愛着と協力意向の形成にどのような影響を与えるのかを明らかにすることである。この目的を達成するために本研究では非常設型カフェの利用者を対象としたアンケート調査とカフェ内の観察を実施し、協力意向の形成と関連が考えられる利用者の属性を探索した上で、カフェにおける経験に該当する物質的環境と社会的環境に対する評価、地域に対する愛着、地域に対する協力意向のそれぞれの関係について考察を行う。本研究の実現によって、小林・山田(2014)が提示したモデルにおける協力意向の形成プロセスがより効果的に機能するカフェ内の仕掛けと利用者を特定することが可能となり、現実の非常設型カフェにおける運営者と利用者によるコミュニティの持続性向上も期待できる。

3. 調査方法

3.1. 調査の概要

本研究では能美市で開設された非常設型カフェ(ひよっこりカフェ)の利用者に対して質問紙調査を実施した。調査は2013年7月28日(以降、パート4と表記)と11月3、4日(以降、パート5と表記)の2回実施された。いずれも能美市内の公共施設をカフェとして利用し、パート4はこくぞう里山公園交流館、パート5は石川県立九谷焼技術研修所で実施された(図2)。



図2 ひよっこりカフェの様子と会場外観
上図: パート4(こくぞう里山公園交流館)、
下図: パート5(石川県立九谷焼技術研修所)

調査票は飲食物の注文を行った後に手渡しされ、中学生以上のすべての利用者に配布された。調査票を手渡す際に、カフェを利用している間に調査票への記入を行うことを利用者に依頼した。記入された調査票は、利用者がカフェから退出する際にカフェの出口にて調査者が回収した。調査票を配布する時間と回収する時間を記録することで利用者がカフェに滞在した時間の計測を行った。

パート4の調査票は89名に配布され、そのうち87名からの回答を得た。調査票の回収率は97.8%である。パート5の調査表は162名に配布され、全員からの回答を得た。

各回における回収標本を表1に示した。パート5は九谷陶芸村まつりとの共催であったため、市外や県外に居住する利用者が半数を超えたが、パート4は特に他のイベントとの共催ということがなかったため、市内に居住する利用者の割合が61.9%であった。また、パート5はパート4に比べて60代以上の利用者の割合が23.4ポイントも高く、利用者の年齢層が上がっているのが特徴である。

⁴ ひよっこりカフェは、普段カフェとして利用されない公共施設で開催されている。それにより通常とは異なる方法で公共施設を利用してもらうことで、カフェ利用者が当該施設及び地域の新しい魅力を発見することを期待している。

表 1 各パートにおける回収標本の概要

	人数(有効%)	
	パート4	パート5
性別		
男	35 (40.7)	62 (43.7)
女	51 (59.3)	80 (56.3)
年齢		
10歳代	6 (7.0)	2 (1.4)
20歳代	10 (11.6)	8 (5.5)
30歳代	27 (31.4)	29 (20.0)
40歳代	20 (23.3)	26 (17.9)
50歳代	13 (15.1)	28 (19.3)
60歳代以上	10 (11.6)	52 (35.9)
居住地		
石川県能美市内	52 (61.9)	67 (48.9)
石川県内の能美市 以外の市町村	30 (35.7)	46 (33.6)
石川県外	2 (2.4)	24 (17.5)
職業		
会社員	37 (44.0)	41 (29.1)
公務員	11 (13.1)	22 (15.6)
自営業	4 (4.8)	9 (6.4)
主婦	16 (19.0)	33 (23.4)
学生	6 (7.1)	8 (5.7)
その他	10 (12.0)	28 (19.8)

3.2. 調査の概要

パート4、5で共通した調査票の質問項目は、①カフェの居心地満足度について、②カフェで良かったもの・こと、③地域の魅力と感じたメニューの有無、④カフェにおける知らない他者とのコミュニケーションについて、⑤カフェの運営に対する協力意向の有無、⑥回答者の人口統計学的属性について、⑦ソーシャル・キャピタル、の7つである。なおパート5のみ、能美市に対する親しみ(愛着)の増減について尋ねた。

4. 調査結果

4.1. 協力意向と関連する要素の探索

カフェ内やアンケートの中でひょっこりカフェ開催の背景や目的について一切触れることなく、パート4と5の利用者に対して「機会があればこのようなカフェに企画・協力したいか」と尋ねたところ、パート4では回答者の74% (50名)、パート5では回答者の36% (45名)が「はい」と回答した。各回において協力意向を持つ利用者の割合には大きな差異があった。

この差異はカフェにおける経験ではなく、利用者の属性に起因する可能性が考えられるため、まず初めに市内居住の利用者と市外居住の利用者で協力意向の差を調べた。その結果、パート4では両者とも半数以上が協力意向を示し、パート5では両者とも協力意向を示した者は半数以下であった。居住地と協力意向の有無の関係をみるために χ^2 検定を行ったところ、表2に示したように両

者の間にはパート4 ($\chi^2=0.30$, $df=1$, n.s.) とパート5 ($\chi^2=3.705$, $df=1$, n.s.) 共に有意な関連は確認されなかった。つまり、協力意向の有無は利用者の居住地と関係がないと言える。

表 2 利用者の居住地別の協力意向の有無

		パート4			χ^2 検定
		はい	いいえ	合計	
あなたは機会があれば、このようなカフェを企画したり、運営に協力したいと思いますか？					
利用者の	市内	30	10	40	n.s.
居住地	市外	19	7	26	
	合計	49	17	66	
		パート5			χ^2 検定
		はい	いいえ	合計	
あなたは機会があれば、このようなカフェを企画したり、運営に協力したいと思いますか？					
利用者の	市内	26	32	58	n.s.
居住地	市外	17	44	61	
	合計	43	76	119	
表中の数値は度数				n.s.: 非有意	

次に利用者の居住歴による協力意向に違いがないかを確認した。ここでは地域での居住歴の長さと同地域への協力意向の関係を調べるのが目的であるので、分析対象者を能美市内に居住する利用者に限定した。居住歴を10年未満と10年以上の二群に分割してパート4、5のそれぞれについて χ^2 検定を行ったところ、表3に示したように両者の結果とも5%水準で有意ではなかった(パート4: $\chi^2=.903$, $df=1$, n.s., パート5: $\chi^2=.339$, $df=1$, n.s.)。

表 3 市内における居住歴による協力意向の有無

		パート4			Fisherの 直接確率検定
		はい	いいえ	合計	
あなたは機会があれば、このようなカフェを企画したり、運営に協力したいと思いますか？					
市内での	10年未満	8	4	12	n.s.
居住歴	10年以上	21	5	26	
	合計	29	9	38	
		パート5			χ^2 検定
		はい	いいえ	合計	
あなたは機会があれば、このようなカフェを企画したり、運営に協力したいと思いますか？					
市内での	10年未満	7	6	13	n.s.
居住歴	10年以上	16	20	36	
	合計	23	26	49	
表中の数値は度数				n.s.: 非有意	

その他に協力意向と関連する利用者の属性やカフェにおける経験として何が考えられるであろうか。可能性として利用者が元から互酬的な価値観を持っていたことやカフェにおける居心地の良さが愛着を生み出したこと等が考えられる。そこで我々は協力意向と、利用者のソーシャル・キャピタル、カフェにおける滞在満足度、滞在

時間の関連を分析した。ソーシャル・キャピタルは「社会ネットワーク」に関わる3問と「信頼」に関わる2問から計算される社会関係資本指数 (SCI) ⁵として指標化した。居心地満足度はカフェにおける居心地の良さについて7段階のリッカート尺度を用いて尋ねた。

表4は、各回における協力意向の有無別の居心地満足度と滞在時間、そしてSCIの平均値を示したものである。パート4,5共にいずれの項目の平均値も協力意向を示した利用者の方が高いが、すべての項目で両者に有意な差は認められなかった。すなわち居心地満足度や滞在時間といったカフェの経験や時間、利用者のソーシャル・キャピタルが協力意向の有無を左右しているのではなく、それ以外の要素が協力意向に寄与している可能性が高い。

表4 協力意向の有無別の居心地満足度、滞在時間、SCIの平均値

パート4						
	居心地満足度		滞在時間		SCI	
カフェの企画・運営・協力をしたいか?	はい (n=49)	いいえ (n=18)	はい (n=50)	いいえ (n=18)	はい (n=46)	いいえ (n=16)
平均値	5.59	5.28	34分	33分	3.15	3.1
標準偏差	.89	.75	33分	26分	.82	.71
パート5						
	居心地満足度		滞在時間		SCI	
カフェの企画・運営・協力をしたいか?	はい (n=44)	いいえ (n=76)	はい (n=43)	いいえ (n=77)	はい (n=40)	いいえ (n=69)
平均値	5.61	5.43	31分	24分	3.34	3.18
標準偏差	.90	1.04	21分	16分	.75	.68

では、上述した以外のどのような要素が協力意向の形成に寄与していると考えられるだろうか。次にカフェにおける地域に対する物質的環境と社会的環境に関わる具体的な経験と協力意向の関係について見ていくことにする。

4.2 協力意向と物質的環境に対する評価の関係

「物質的環境に対する評価」に関する質問として、ひよっこりカフェにおいて「地域の魅力と感じたメニューがあったか」と尋ねたところ、パート4で70.1% (62名)、パート5:80.5% (95名)の回答者が「はい」と答えた。続いて、協力意向の有無によって地域の魅力と感じたメニューに違いがあるかを調べるためにFisherの直接確率検定を行った。表5からパート4は有意差がなく、パート5では有意差が確認された。連関についてもパート5ではφ係数から有意な連関関係であることが示された。パート5ではメニューの中で魅力と感じたものがあった

利用者のほとんどが協力意向を示したが、パート4ではメニューの中で魅力と感じたものの有無に関わらず協力意向を示していることがわかる。

同様に、ひよっこりカフェで良かったものとして能美市の特産品である九谷焼の「カップや皿などの器」を挙げた回答者 (パート4:13名、パート5:46名)と協力意向の関係性についてχ²検定を行ったが、こちらは両者ともに有意な差は確認されなかった。

表5 協力意向の有無と地域の魅力と感じたメニューの有無の関係

パート4				
あなたは機会があれば、このようなカフェを企画したり、運営に協力したいと思いますか?				
	はい	いいえ	合計	
メニューの中で地域の魅力と感じたものはありましたか	はい 47 (70.1%)	いいえ 15 (22.4%)	62 (92.5%)	
	いいえ 3 (4.5%)	はい 2 (3.0%)	5 (7.5%)	
	合計		67 (100%)	
度数(パーセント)	50 (74.6%)		17 (17.0%)	
Fisherの正確確率検定 n.s. φ係数=.095, n.s.				
パート5				
あなたは機会があれば、このようなカフェを企画したり、運営に協力したいと思いますか?				
	はい	いいえ	合計	
メニューの中で地域の魅力と感じたものはありましたか	はい 42 (35.6%)	いいえ 53 (44.9%)	95 (80.5%)	
	いいえ 2 (1.7%)	はい 21 (17.8%)	23 (19.5%)	
	合計		118 (100%)	
度数(パーセント)	44 (37.3%)		74 (62.7%)	
χ ² (2) = 9.988, p < .01. φ係数=.291, p < .01				

4.3 協力意向と社会的環境に対する評価の関係

「社会的環境に対する評価」に関する質問として、カフェにおける「他人とのコミュニケーション」について尋ねたところ、「知らない人とコミュニケーションをしましたか」という質問では、パート4で36.4% (24名)、パート5で13.7% (17名)が「はい」と回答した。

表6は協力意向の有無と知らない他人とのコミュニケーションの関係を示したものである。両者の関係について各回でχ²検定を行ったところ、パート4では有意差がなく、パート5では有意差が確認された (χ²=4.688, df=1, p < .05)。連関についても有意な結果となっている (φ係数=.291, p < .01)。パート4では知らない他者とのコミュニケーションとは関連なく協力意向が示されているが、パート5では知らない他者とコミュニケーションを行った利用者が協力意向を示す割合が高いと言える。この結果の違いについては考察で検討する。

⁵ 社会関係資本指数 (SCI) の計算方法については小林・山田 (2014) を参照されたい。

表 6 知らない他人とのコミュニケーションと協力意向の関係

パート4				
あなたは機会があれば、このようなカフェを企画したり、運営に協力したいと思いますか？				
	はい	いいえ	合計	
知らない人とコミュニケーションをしましたか	はい 20 (30.3%)	いいえ 4 (6.1%)	24 (36.4%)	
	いいえ 28 (42.4%)	14 (21.2%)	42 (63.6%)	
	合計 48 (72.7%)	18 (27.3%)	66 (100%)	
度数(パーセント)	$\chi^2(2) = 2.139, n.s.$ Φ 係数=.180, n.s.			
パート5				
あなたは機会があれば、このようなカフェを企画したり、運営に協力したいと思いますか？				
	はい	いいえ	合計	
知らない人とコミュニケーションをしましたか	はい 10 (8.1%)	7 (5.6%)	17 (13.7%)	
	いいえ 34 (27.4%)	73 (58.9%)	107 (86.3%)	
	合計 44 (35.5%)	80 (64.5%)	124 (100%)	
度数(パーセント)	$\chi^2(2) = 4.688, p < .05.$ Φ 係数=.194, $p < .05$			

その他にカフェで出来たこととして「スタッフとの交流」と回答した利用者（パート4：28名、パート5：23名）と協力意向の関係について χ^2 検定を行ったところ、こちらはパート4 ($\chi^2=2.139, df=2, n.s.$)、パート5 ($\chi^2=4.688, df=2, n.s.$)とも有意な関連は見られなかった。

4.4 協力意向に対する影響度

ここまでの分析結果からパート5においてカフェへの協力意向の有無と地域に魅力と感じたメニューの有無、及び知らない他者とのコミュニケーションの有無が関係することがわかった(表5、6)。そこで、パート5における協力意向の有無に対して、これらの2つの変数と居住歴、年齢が影響するかを明らかにするために、多重ロジスティック回帰分析を行った。変数の選択は、尤度比検定による変数増加法を用いた。居住歴を含めたのは先行研究から協力意向と関連性が高いことが知られているためであり、年齢を含めたのはひょっこりカフェが若年者を主な利用層と仮定しているためである。

表7は多重ロジスティック回帰分析の結果を示したものである。カフェへの協力意向の有無に影響する変数として、地域の魅力と感じたメニューと知らない他者とのコミュニケーション、年齢が選択された。地域の魅力と感じたメニューのオッズ比は11.602、知らない他者とのコミュニケーションのオッズ比は5.185であり、年齢のオッズ比は0.587であった。いずれの変数も5%水準で有意性が認められた。

表 7 多重ロジスティック回帰分析の結果

	単位変化量	オッズ比	95%信頼区間
地域の魅力と感じたメニュー	1(0-1)	11.602 *	1.38-97.49
知らない他者とのコミュニケーション	1(0-1)	5.185 *	1.40-19.19
年齢	10(1-7)	0.587 *	0.42-0.82

* $p < .05$; ** $p < .01$; モデル χ^2 検定 $p < .01$
 Hosmer-Lemeshow検定 $p = .764$; 判別率 71.6%
 メニューとコミュニケーションのコード化: 0:いいえ、1:はい
 年齢のコード化: 1:10代、2:20代... 6:60代、7:70歳以上

4.5 居住地別の協力意向と地域愛着の関係

次に地域への愛着の高まりと協力意向の間に影響を与える外部要因について検討を行う。協力意向の有無は利用者の居住地と有意な関連はなかったが(表2)、利用者の居住地によって地域に対する愛着の増減についても差異がないであろうか。

調査票では、利用者に「カフェに来ることで能美市への親しみは増しましたか」と尋ね、「とても増した」から「とても減った」までの7段階で回答してもらった上で3から-3点の範囲で点数化した(この質問はパート5でのみ実施)。分析では、利用者の居住地を市内と市外に分けて協力意向の有無と能美市への親しみの増減の関係を調べた(表8)。すると、市外居住者では協力意向のある人の方が市内居住者よりも有意に親しみの高いことが確認された。一方で市内居住者では両者の間に有意差はなかった。協力意向の有無と能美市への親しみの増加との関連を調べるため、居住地別で相関比を求めたところ、市外居住者では $\eta = .32 (p < .05)$ 、市内居住者では $\eta = .021 (n.s.)$ であった。

表 8 協力意向の有無による能美市への親しみの増加の違い(パート5)

市外居住者			
	平均順位	順位和	統計
協力意向	はい(n=17)	38.0	646.0
	いいえ(n=42)	26.8	
			$p < .05$
市内居住者			
	平均順位	順位和	統計
協力意向	はい(n=25)	27.6	689.0
	いいえ(n=30)	28.4	
			n.s.

統計はMann-Whitney検定によるp値

4.6 地域愛着と物理的環境・社会的環境に対する評価との関係

それでは、地域への愛着とカフェにおける経験、具体的には物質的環境に対する評価と社会的環境に対する評

価の関連はどのようになっているのか。地域の魅力と感じたメニューの有無と能美市への親しみの程度の関連比は $\eta=.29$ ($p<.05$)、知らない他者とのコミュニケーションの有無との関連比は $\eta=.18$ ($p<.05$)であった。両者とも有意に相関しており、結果からカフェにおける経験と親しみの増加には正の相関があることがわかった。

先ほどと同じように、市内外の居住地の違いでこれらの相関比に違いがないかを調べたところ(表9)、市外居住者では能美市への親しみと地域の魅力と感じたメニューの有無の相関比 $\eta=.46$ が5%水準で有意であり、知らない他者とのコミュニケーションと親しみの程度との相関比 $\eta=.15$ は有意ではなかった。一方で、市内居住者では能美市への親しみと地域の魅力と感じたメニューの有無との相関比 $\eta=.20$ が有意ではなく、知らない他者とのコミュニケーションの有無と親しみとの相関比 $\eta=.32$ が有意となる逆の結果が得られた。

表9 居住地別の能美市への親しみとの相関比
(パート5)

	市外居住者	市内居住者
地域の魅力と感じたメニューの有無	.46*	.20
知らない他者とのコミュニケーションの有無	.15	.32*

* $p < .05$

5. 考察

5.1. 物質的環境・社会的環境に対する評価から見る協力意向の形成

パート5における多重ロジスティック回帰分析から、利用者の協力意向に対して地域の魅力と感じたメニューの有無と知らない他者とのコミュニケーションの有無が関連することがわかった(表5)。その一方で、利用者の協力意向の有無と市内外の居住地や市内の居住歴には有意な関連が認められず(表2、3)、さらにはカフェにおける滞在満足度や滞在時間においても有意な差が認められなかった(表4)。これらの結果から、カフェ滞在を通じた協力意向の形成には、利用者がカフェ内において具体的にどのような経験をしたのが影響すると考えられる。パート4よりも市外居住者の割合が大きかったパート5に限って言えば、地域の魅力と感じるメニューを食べることや知らない他者とコミュニケーションするという経験がカフェへの協力意向に寄与することが示唆される。

小林・山田(2014)のモデルではこの2つ以外にも物質的環境に対する評価として地域の特産品である「九谷

焼のカップや器」、社会的環境に対する評価として「スタッフとの交流」が挙げられていたが、両者と協力意向の有無には有意な関連が見られなかった。これらの理由として、1) 提供しているカップや器が九谷焼であることが利用者に明示されていなかったこと、2) 観察からスタッフと利用者の会話が挨拶等の短いものが多かったこと、が考えられる。そのため、利用者の物質的環境と社会的環境に対する肯定的な評価を高めることに寄与しなかった可能性がある。一方でメニューには地域の特産品が用いられていることが明記されており、また知らない他者とのコミュニケーションは、「スタッフや相席がきっかけとなって挨拶よりも長い時間行われていた」ことを観察から確認している。

5.2. 年齢が協力意向に与える影響

パート5のデータにおける多重ロジスティック回帰分析の結果から、協力意向に影響するその他の変数として、提示したモデルでは想定していなかった「年齢」が明らかとなった(表7)。一般的に年齢が高いほど地域に対する協力意向も強いことが知られているが、この関連は居住年数を媒介とした擬似相関の可能性も指摘されている(引地2012)。しかし、分析結果からは協力意向に対する年齢のオッズ比が1を下回っていることから、年齢水準の増加に伴って協力意向を持つ利用者の割合が低下することがわかった。つまり先行研究の結果とは異なり、年齢が低いほど協力意向を有する利用者の割合が大きくなることを示している。この理由として、ひょっこりカフェの主な利用層のターゲットが10代から30代の若年者であり、カフェ空間やメニュー、チラシに至るまで若年者の嗜好を意識した作りとなっていることが考えられる。このようなカフェづくりの工夫が、カフェにおける経験以外にも若年利用者の協力意向に対して影響を与え、彼らの協力意向の形成に寄与した可能性がある。

5.3. 地域に対する愛着と協力意向、及び物質的環境・社会的環境に対する評価との関係

協力意向と物質的環境・社会的環境に対する評価との関係については明らかにすることができた。しかし、その両者を繋ぐ地域に対する愛着との関係に影響を与える外部要因は何であるのか。地域に対する愛着の増減は居住地に大きく依存することが考えられるため、利用者の居住地を市内と市外に分類した上で、二群の得点の比較分析を行った(表8)。

市外居住者で協力意向を示した利用者は、カフェを通じた能美市への親しみの増加が市内居住者の利用者より

有意に高いことがわかる。つまり、カフェでの地域に対する愛着の形成は、市外に居住する利用者の協力意向に寄与している可能性が高い。パート5は、パート4と比べて市外居住者の利用割合が高いため、能美市に対する愛着が相対的に低い利用者が多いと想定される。そのことから物質的環境と社会的環境に対する評価と能美市への親しみの増減の間に有意な正の相関があり、そして物質的環境と社会的環境に対する評価と協力意向の有無にも有意な関連が表れたと考えられる(表5、6)。逆にパート4では、市内居住者の割合が高く、これらの利用者は既に地域に対する愛着が形成されている可能性が高いため⁶、2つの環境に対する評価と協力意向の有無で関連性に有意な差が現れなかったと考えられる。

物質的環境・社会的環境に対する評価と地域愛着との関係については、相関比から有意な相関があることを示すことができたが、因果関係については明らかにできていない。しかし、市外に居住する利用者の多くは居住していない能美市に対する愛着が低いもしくは中立的であることを仮定すれば、相関比の結果はカフェにおける経験によって愛着が高まったと推測することができよう。

他にも相関比の分析から、市内に居住する利用者では、能美市への親しみと他者とのコミュニケーションの有無に有意な相関があるのに対し、能美市への親しみと地域の魅力とを感じるメニューの有無には有意な相関が見られなかった(表9)。この結果は、市内に居住する利用者について、地域の魅力的なメニューよりも知らない他者とコミュニケーションするほうが能美市に対する親しみが高めることを示唆するものである。

6. 結論

本稿では、非常設型カフェの利用者の属性とカフェにおける経験が、利用者の地域に対する愛着と協力意向の形成に与える影響を明らかにするため、非常設型カフェの利用者にアンケート調査を実施し、利用者のカフェに対する協力意向の形成プロセスを検討した。

アンケート調査の分析結果から次のことがわかった。1) 利用者の協力意向の有無と利用者の市内外居住地、滞在満足度、滞在時間、SCIには有意な関連はない。2) 市外居住者の利用割合が大きいパート5においては、利用者の協力意向の形成には、地域の魅力となるメニューの有無、知らない他者とコミュニケーションの有無、年齢が影響した。逆に市内居住者の利用割合が大きいパート4

では、利用者の協力意向と地域の魅力となるメニューの有無、及び知らない他者とのコミュニケーションの有無との間に有意な関連はない。3) 協力意向を有する市外の居住者は、協力意向を有さない利用者と比べてカフェを経験することによる能美市への親しみの増加が有意に高い。その一方で、協力意向を有する市内の居住者は、協力意向を有さない利用者と比べてカフェを経験することによる能美市への親しみの増加に有意差はない。4) 能美市への親しみと地域の魅力となるメニュー、知らない他者とのコミュニケーションとの相関比は有意である。

以上の結果を踏まえてモデルが効果的に機能する利用者属性とカフェにおける経験について次のことが示唆される。市外居住者の利用割合が大きかったパート5では③の物質的環境・社会的環境として挙げた地域の魅力となるメニューと他者とのコミュニケーションが⑤の協力意向と有意に関連していた。この事実から市外居住者の利用者に対しては地域の魅力となるメニューの提供と他者とのコミュニケーションが協力意向の形成に寄与すると考えられる。その際に④の地域に対する愛着の高まりを経由しているかどうかについては、協力意向を有する市外居住者の能美市への親しみの増加が協力意向を有さない利用者よりも有意に高いことから、地域に対する愛着が中立的であると仮定される利用者に対してはモデルにおける③④⑤のプロセスが効果的に機能していると考ええる。

従来の協力意向の形成理論では、地域に居住することによって地域愛着が長い期間かけて形成され、地域に対する協力意向が形成されると考えられてきた。しかし、本研究の結果からは、市外居住者であっても非常設型カフェにおける短時間の経験によって非常設型カフェがある地域に対する愛着が高まり、協力意向が形成されることが明らかとなった。この結果を受け、小林・山田(2014)モデルでは利用者として想定されていなかった地域に居住しない人たちにも積極的にひよっこリカフェを利用してもらうことで、利用者の多様性を確保できるだけでなく、カフェの企画・運営に対して協力意向を持つ利用者を増やすことができると考える。運営者側の人数が増えることは、カフェ運営の持続性を高めると共に、モデルで想定している運営者と利用者のコミュニティ形成におけるソーシャル・キャピタルの向上にも寄与するであろう。これを実現するためには、物質的環境と社会的環境に対する肯定的評価を高めると考えられるカフェ内の経験を一層充実したものにする必要がある。具体的には魅力となる地域資源のカフェ利用者への積極的な周知、そしてスタッフが媒介となって知らない利用者同士のコミ

⁶ 平成25年度の能美市民満足度調査(能美市2013)からは、能美市民の8割以上が能美市に愛着を持っているという結果が得られている。

コミュニケーションを促すことが有効となる。

7. 今後の課題

居住地に関わらずある一定数の利用者がカフェの企画・運営に関する協力意向を示すことはわかっているが、この協力意向が必ずしも実際の協力行動に繋がっているわけではない。運営活動への参加を増やすためには、協力意向から協力行動に至るプロセスや参加を阻害する要因を明らかにする必要がある。地域の居場所において利用者が主体的に活動を始める要因を分析している坂倉他(2012)によると、協力行動に発展する契機は利用者の内的動機付けと他者との関係性の相互作用であり、それらを促進するためには一定の時間的猶予とスタッフのサポートが重要となる。非常設型カフェでは他者との相互作用の時間を十分に深めるための時間が乏しいため、その部分を補うための効果的な仕掛けをカフェの中で取り入れていく必要がある。そのための次なる研究調査として、現状でカフェの運営に協力している複数名のスタッフに対して協力行動に至ったプロセスや要因を明らかにするためのインタビューを実施し、効果的な仕掛けについて検討を行う予定である。

謝辞

本調査の実施にあたりご協力頂いたひよっこりカフェの利用者の方々、そしてひよっこりカフェの運営主体である能美市第3の生活拠点創出実行委員会（現サードプレイス研究会）、及び能美市地域振興課の皆さまに心よりお礼を申し上げます。

引用・参考文献

- Bonaiuto, M., Aiello, A., Perugini, M., Bonnes, M., & Ercolani, A. P., 1999. Multidimensional perception of residential environment quality and neighbourhood attachment in the urban environment. *Journal of environmental psychology*, 19(4), pp. 331-352.
- Brown, B. B., & Perkins, D. D., 1992. Disruptions in place attachment, In *Place attachment* (pp. 279-304), Springer US.
- Brown, B. B., Perkins, D. D., & Brown, G., 2004. Incivilities, place attachment and crime: Block and individual effects. *Journal of environmental psychology*, 24(3), pp. 359-371.
- 長寿社会文化協会, 2014, 「まちの縁側を増やし、つながりを広げる事業活動報告書」.
(<http://blog.canpan.info/com-cafe/img/E6B4BBE58B95>

E5A0B1E5918AE69BB8.pdf) [Oct. 2014]

- 舟橋國男, 2011, 「サードプレイス考」, 『建築と社会』 Vol. 92, (1069), pp. 12-14.
- 林田大作, 2011, 「オフィスワーカーにとっての「サードプレイス」」, 『建築と社会』, 92(1069), pp. 15-16.
- Hidalgo, C. & Hernandez, B., 2001, Place attachment: Conceptual and empirical questions. *Journal of Environmental Psychology*, 21, pp. 273-281.
- 引地博之・青木俊明・大淵憲一, 2006, 「地域に対する愛着形成過程—社会的アイデンティティからの検討」 『日本社会心理学会第47回大会発表論文集』, pp. 216-217.
- 引地博之, 2012, 「地域内協力の促進：地域コミットメントの効果とその形成機構」, 東北大学文学研究科博士論文.
- 久田邦明, 2004, 「コミュニティ・カフェの可能性」, 『月刊社会教育』, 国土社, 48(6), pp.37-43.
- 石盛真徳, 2004, 「コミュニティ意識とまちづくりへの市民参加：コミュニティ意識尺度の開発を通じて」, 『コミュニティ心理学研究』, 7(2), pp. 87-98.
- 小林重人・山田広明, 2014, 「マイプレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究—石川県能美市の非常設型「ひよっこりカフェ」を事例として—」, 『地域活性研究』, 5, pp. 3-12.
- 日本建築学会編, 2011, 『まちの居場所』, 東洋書店.
- 能美市市民生活部企画振興課, 2013, 「平成25年度 能美市民満足度調査報告書」.
(<http://www.city.nomi.ishikawa.jp/data/open/cnt/3/3993/1/hokokusyo.pdf>) [Oct. 2014]
- 能美市市民生活部地域振興課, 2014, 「第3の生活拠点創出事業 3カ年事業成果報告書」.
(http://www.city.nomi.ishikawa.jp/data/open/cnt/3/1017/1/H25_third_place_project_report.pdf) [Oct. 2014]
- 大分大学福祉科学研究センター, 2011, 「コミュニティカフェの実態に関する調査結果（概要版）」.
(http://www.hwrc.oita-u.ac.jp/machiokoshi/pdf-files/06-02-Text_2011_2.pdf) [Oct. 2014]
- Oldenburg, R., 1989, *The great good place*. New York: Marlowe & Company.
- Reicher, S. D., 1984, Social influence in the crowd: Attitudinal and behavioral effects of de-individuation in conditions of high and low group salience, *British Journal of Social Psychology*, 23(4), pp. 341-350.
- リチャード・フロリダ, 2008, 『クリエイティブ資本論』, 井口典夫訳, ダイヤモンド社.

- 坂倉杏介・保井俊之・白坂成功・前野隆司, 2012, 「「共同行為における自己実現の段階モデル」による「地域の居場所」の来場者の行動分析—東京都港区「芝の家」を事例に」, 『地域活性研究』, 4, pp. 23-30.
- 杉本容子・鳴海邦碩・澤木昌典・岡絵理子, 2004, 「大都市市街地内古集落における新来居住者の旧来コミュニティへの参入可能性に関する研究—伝統的祭りへの参加実態と意識を通じて」『環境情報科学学術研究論文集』, 17, pp. 183-188.
- 鈴木春奈・藤井聡, 2008, 「地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究」, 『土木計画学研究・論文集』, 25, pp. 311-318.
- 谷口綾子・今井 唯・原 文宏・石田東生, 2012, 「観光地における多様な主体の地域愛着の規定因に関する研究—ニセコ・倶知安地域を事例として」, 『土木学会論文集 D3 (土木計画学)』, 68(5), pp. 551-562.
- Waxman, L., 2006, The Coffee Shop: Social and Physical factors Influencing Place Attachment, *Journal of Interior Design*, 31(3), pp. 35-53.
- White, M., 2012, *Coffee life in Japan*. University of California Press.

Abstract

The purpose of this study is to examine visitors' attributes and experiences in a pop-up cafe, to understand whether increasing their attachment to the local area helped to form a cooperative attitude towards the management of the cafe. Questionnaire surveys were conducted among the visitors to "Hyokkori Cafe" in Nomi, Ishikawa prefecture, for the purpose of the study. We found that providing a menu that used local resources, and communication with a stranger in the cafe influenced visitors' cooperative attitude towards the management of the cafe. We also found that there was a significant correlation between visitors' positive evaluations of these two experiences and place attachment. Based on the results, we concluded that these two experiences in the cafe are effective in creating a cooperative attitude among visitors who take a neutral stance to place attachment.